第419号

国立能楽堂

特集

大伴家持と越路の水海
―謡曲「藤」の歴史舞台―

藤井一二

平成三十年七月

《月間特集・能のふるさと・越路》

定例公演

7月18日(水)午後6時30分開演

仕舞・観世流

花筐

クルイ

シテ　梅若紀彰
川口晃平
山中迓晶
地謡　角当直隆
松山隆之

狂言・大蔵流

鏡男

シテ／男　大蔵彌太郎
アド／妻　大蔵基誠
笛　藤田次郎
小鼓　田邊恭資
大鼓　山本哲也

能・観世流

木曽願書

シテ／覚明　観世銕之丞
ツレ／木曽義仲　観世淳夫
ツレ／池田次郎　柴田稔
ツレ／木曽郎等　北浪貴裕
ツレ／木曽郎等　長山桂三
ツレ／木曽郎等　谷本健吾
ツレ／木曽郎等　安藤貴康
ツレ／木曽郎等　青木健一

仕舞　花筐

断絶した皇統を継ぐため生国・越前の国（現在の福井県）を捨て都に上った男大迹皇子＝継体天皇。縁を切られた照日の前は皇子を追い、形見の花筐（花籠）を証拠として行列に近づきます。

この仕舞では照日の前が皇子との愛の日々を回想。復縁を望んで狂気を偽る劇的な場面です。

狂言　鏡男

●あらすじ

都での訴訟が叶い晴れて帰国する越後の国（現在の新潟県）松の山家の男。故郷には一面もない鏡を土産に求めて帰ります。夫の帰郷を大喜びで迎えた妻ですが、鏡を見ると……。

●鑑賞の手引き

物の姿を映し出す鏡は昔の人にとって畏敬の対象でした。伊勢神宮に祀られる八咫の鏡（御神鏡）は天照大神の神霊。「野守」「昭君」「皇帝」は鏡の呪術性を主題にしたドラマであり、ワキ方の大曲「松山鏡」は鏡をめぐる夫婦の悲哀を描く能。この「松山鏡」に取材し悲劇を喜劇に反転させたのが狂言「鏡男」で、後に能と同名の落語へ転生します。ちなみに、能の曲目として現在は「まつやまかがみ」ですが、本来は「松の山家の鏡」の意味を示す「まつのやまかがみ」でした。

白銅などを鋳て作る金属鏡は貴重で、男も初めて所持する品。「鏡の中に都の女が住み着いている！」と信ずる妻を馬鹿にするのは現代人の傲慢というものでしょう。故郷（「松の山家」は現在の新潟県十日町市）の家邸を守り通した女手一つの忍耐力と生活力とがなければ、能「砧」「鳥追船」のような家庭崩壊さえあり得たのです。最後、本気で夫を追いかける妻の激怒は「夫が無事息災で帰国したのが何よりの土産」と喜んだ愛情の裏返しですから、これは腹を立てるのが至極ごもっとも。

つまりこの狂言。田舎者の無知をあざ嗤う浅薄な笑劇ではなく、心温まる夫婦愛のドラマなのです。

能　木曽

●あらすじ

勇将・木曽（源）義仲は一万騎の手勢を率いて越中の国（現在の富山県）埴生の里に陣を布きます。平家の敵軍が立てこもるのは程近い礪波山。夜討ちで急襲を掛けようと軍議が進みます。

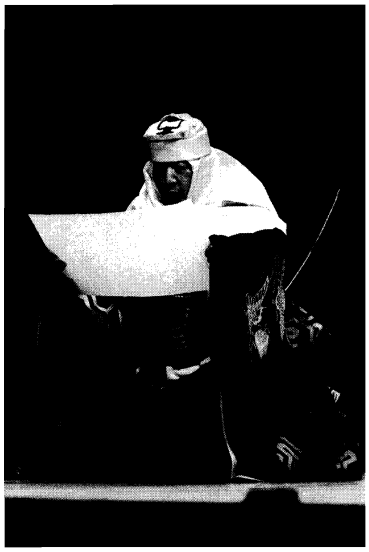
陣の北方、夏山の木蔭に朱塗の玉垣が見えます。当地に祀られる八幡宮と知った義仲は源氏の氏神であることを吉兆と喜び、「手書き」（祐筆＝代筆書記担当の側近）の覚明に命じて戦勝祈願の願書を認めさせ、読み上げさせます。その見事な出来ばえに一同は感服。義仲はみずからの上差（戦闘開始の儀礼として最初に射る鏑矢）を覚明に託し、願書に添えて八幡の神前に奉納します。戦の門出を祝い、覚明はめでたく舞を舞います（［男舞］）。

酒宴の半ば。勝利を約束するかのように埴生八幡宮の方角から山鳩の群れが飛来し、味方の軍旗をめぐって飛び翔ります。神助を確信した義仲一党はいよいよ力を得、その夜、倶利伽羅峠の合戦で平家の大軍を攻め滅ぼしたのでした。

●鑑賞の手引き

源平軍談の緒戦の一つ「倶利伽羅峠の戦い」の開戦は寿永二年（一一八三）五月十一日の日没。『平家物語』巻七によれば平家七万騎に源氏四万

笛　藤田次郎
小鼓　大倉源次郎
大鼓　山本哲也
後見　清水寛二　西村高夫
地謡　川口晃平　永島充　松山隆之　馬野正基　坂真太郎　梅若紀彰　山中迓晶　角当直隆


木曽　願書　浅見真州
撮影＝吉越研

騎（義仲の手勢一万騎を含む）。信憑性の高い同時代の貴族・藤原兼実の日記『玉葉』によれば平家四万騎に源氏五千騎。いずれにせよ、どう見ても劣勢であった義仲軍が大勝し平家軍は壊滅。この戦果が、続く七月末の平家都落ち・義仲上洛の要因となったという意味で、まさに歴史の潮目を変えた大戦でした。『平家物語』では燃える松明を角に括り付けた牛の群れを陣中に放って混乱させ、倶利伽羅峠の断崖から平家軍の大半を追い落としたと説かれます。これは多分にフィクションと思われますが、いかにも劇的な奇策として昔から著名でした。

この礪波山麓を舞台に、有名な巴御前と同じく義仲に近侍した女武者・葵の霊が憑依して語る番外曲「太刀掘」があります。「二人静」「卒都婆小町」など先行作の影響を受けて作られた能で室町時代の伝書『舞芸六輪次第』に演出記録が残る古曲ですが、ここで葵の霊が語る戦物語の〈クセ〉が観世流の乱曲・喜多流の曲舞（難易度の高い独吟専用の部分謡）「倶利伽羅落」として伝承されます。「木曽」も同じエピソードを舞台化している点で「太刀掘」との影響関係が想定される能ともいえます。

もっとも、江戸時代初期までの原型「木曽」は現在とはまったく別物というほど違います。原作では義仲も覚明も共にツレ（あるいは義仲がシテで後場のシテと合わせて両ジテ）。後場で義仲腹心のワキ・今井兼平が奮戦のさまを見せ、鳩に身を変えた八幡の使神が謡を謡わないシテ役で登場し義仲軍を勝利に導く……観世信光の改作と想定される漢楚軍談の番外曲「星」を思わせる構成と内容でした。これはこれで面白くはあるのですが、願書の朗読が聴きどころの前場と源平の死闘が見どころの後場と、前後の接続が不自然で無理があり、「馬には人、人には馬……積もる木の葉の塵泥のごとく」谷を埋めて死屍累々たる結末を舞台化するには相当の困難さを伴うため江戸時代には上演が絶え、謡曲としても顧みられなくなっていました。

これを再生させたのが鬼才・観世元章（一七二二～七四）でした。十五世観世大夫として彼が後半生を賭けた「明和の改正謡本」は事実上の失敗に終わりますが、長らく番外曲だった「木曽」が改訂されてこの時レパートリーに入ります。後場をカット。「願書」を覚明の独吟とした上で特殊演出化し（後述）、「男舞」を追加。兼平も八幡使神も出さず、全体を四十分程度の爽やかな歌舞能に変えたのです。知名度の低い覚明が目立つ結果となってはいますが、「男舞」を直垂上下で舞うなど（長袴の困難を避けて大口で舞う型もあります）見どころの多い一曲に仕上がっており、元章の改作・新演出の中では筆頭の傑作といえるかもしれません。こうした事情で明治時代に再評価されて観世流の現行曲とはなったものの上演は稀少。国立能楽堂の主催公演としては本日が創立以来わずか二度目です。

小書「願書」は、「安宅」勧進帳、「正尊」起請文と並ぶ当該の至難な謡（以上「三読物」）をシテ・覚明が独吟する特殊演出。原型「木曽」では「何々帰命頂礼～累世明君の曩祖たり」は義仲の、「宝祚を守らんため」以下は地謡の担当でした。元章が改作と同時に小書「願書」を定めたことにより、常の演出では「願書」そのものを省いて謡わないのが建前になりましたが、それではあまりに面白みがなく劇的成果に乏しいため、「木曽」上演の際はこの小書に従うのが慣例化しています。

（村上湛）

◆詞章

仕舞【観世流】

花筐

クルイ

シテ　我よりもなほ物狂ひよ

地謡　おそろしや、おそろしや、世は末世に及ぶといへど、日月は地に墜ちず、まだ散りもせぬ花筐を、暴けなや荒金の地に落とし給はば、天の咎めも忽ちに、罰当たり給ひて、我が如くなる狂気して、儕の物狂ひと言はれさせ給ふな、人に言はれさせ給ふな

シテ　かやうに申せば

地謡　かやうに申せばただ現なき花筐のかごととや思すらん、この君未だその頃は、皇子の御身なれど、朝毎の御勤めに花を手向け礼拝し、南無や天照皇太神宮天長地久と、唱へさせ給ひつつ、御手を合はさせ給ひし御面影は身に添ひて、忘れがたみまでもお懐かしや恋しや

シテ　陸奥の、安積の沼の花がつみ

地謡　かつ見し人を恋種の、しのぶ捩摺誰故ぞ乱れ心は君のため、ここに来てだに隔ある月の都は名のみして、袖にも映されず、また手にも取られず、ただ徒に水の月を望む猴の如くにて、叫び伏して泣き居たり、叫び伏して泣き居たり

能【観世流】

木曽

願書

［一声］

シテ／ツレ　八百万、神も引きます鹿児の名の、弓矢の道こそ久しけれ

義仲　そもそもこれは木曽義仲とは我が事なり

シテ／ツレ　さても平家は越前の、燧が城を攻め落とし、都合その勢十万余騎、この砺波山まで押し寄する

義仲　味方は僅か五万余騎、計略を以て防がんとて

シテ／ツレ　白旗数多調へつつ、黒坂の上に押し立てて、敵の心を疑はしめ、山中に屯させ、夜に入り大手搦手より、一度にかかり倶利伽羅が、谷へ敵を落とさんと

シテ／ツレ　用意をなして義仲は、勢を七手に別ちつつ、その身は殊に精兵、一万余騎を引き従へ、埴生に陣をぞ取りにける、埴生に陣をぞ取りにける

池田　いかに申上げ候、御諚の如く黒坂の上に、多くの白旗を立てて候へば、平家の勢これを見て、あはや源氏大勢向こうたるは、取り籠められては叶ふまじ、ここは便宜の所なりと、砺波山の山中、猿が馬場と申す所に陣を取つて候

義仲　それこそ義仲が願ふ所なれ、さあらば矢合はせは明日たるべし、構へて味方を誡しめ戦はずして、夜に入つて押し寄せうずるにて候、面々にその由申し候へ

池田　畏まつて候

義仲　いかに池田の次郎

池田　御前に候
義仲　これより北に当たつて夏山の茂みの中に、朱の玉垣ほの見えて、片削造りの社あり、あれをばいづくと申すぞ、いかなる神を崇め奉りたるぞ
池田　さん候、あれこそ埴生の八幡宮にて渡らせ給ひ候、この所もそのご領の地にて候
義仲　義仲何となう陣取りしに、八幡の御地なるこそ吉兆なれ、いかに覚明
シテ　御前に候
義仲　且は後代の為、ひとつは当時の祈祷の為、願書を参らせうと思ふはいかに
シテ　御諚の如く、ご願書をご奉納あつてしかるべう候
義仲　さあらば願書を書き候へ
シテ　畏まつて候
シテ　覚明仰せを承り
地謡　箙の中よりも、箙の中よりも、小硯料紙取り出だし、墨磨り筆を和しけるが、思ひ案ずる気色もなく、古書を写すが如くにて、やがて願書を書き終はり御前において読み上ぐる

〈願書〉

シテ　南無帰命頂礼八幡大菩薩は、日域朝廷の本主、累世明君の曩祖たり、宝祚を守らんが為、蒼生を、利せんが為に、三身の、金容を顕して、三所の権扉を、押し開き給へり。ここに頻りの年よりこのかた、平相国と、言ふ者あつて、四海を掌にし、万民を悩乱せしむこれ、仏法の仇、王法の敵なりそもそも曽祖父前の陸奥の守、名を宗廟の、氏族に帰附す、義仲いやしくも、その後胤として、この大功を起こす事、喩へば嬰児の蠡を以て巨海を測り、蟷螂が斧を取つて、隆車に向かふ如くなり、しかれども君の為国の為にこれを起こすのみなり。伏して願はくは、神明納受垂れ給ひ、勝つ事を究めつつ、仇を四方に退け給へ、寿永二年五月日と、高らかに読み上げたり。
地謡　木曽殿を始めとして、その座にありし兵ども、実に文武の達者かなと、みな覚明を褒めにけり
義仲　義仲上差抜き出だし
地謡　これを願書に取り添へて、内陣に納めよと、覚明に賜れば、覚明これを捧げ持ち御前を立ちてゆゆしくも、八幡の宮に参りけり、八幡の宮に参りけり
シテ　いかに申し上げ候、ご願書並びに御上差の鏑、八幡の宮に奉納仕りて候、またこの荘の土民、戦の御門出を祝し、酒肴を奉りて候
義仲　かかるめでたき事こそなけれ、この度の戦に勝たんずる事必定なり、さらば戦の門出を祝ふべし、覚明酌に立ち候へ
シテ　畏まつて候
シテ　八幡の宮の神風に
地謡　敵は木の葉と、散りぬべし
義仲　いかに覚明ひと差し舞ひ候へ
シテ　畏まつて候
地謡　敵は木の葉と、散りぬべし

［男舞］

地謡　酒宴も既に半ばなりしに、酒宴も既に半ばなりしに、不思議や八幡の方よりも、山鳩翼を並べつつ、味方の旗手に飛び翔り、納受の証を顕しければ、木曽殿を始め、軍兵ども、皆一同に伏し拝み、いよいよ加護をぞ願ひける、さてこそ平家の大勢を、倶利伽羅が谷に、追ひ落とし、ただ一戦に、勝利を得しも、実に八幡の、神力なり

（上演に際し、詞章に多少の異同がある場合もございます。あらかじめご了承ください。）